

**座談会**

教材活用の道しるべ

## 『深め発見する喜び』

— 言語力とメディア活用能力の向上を目指す教師の支援 —

**日時** 2009年2月17日

**参加者** 甲斐 睦朗 (京都橘大学教授 元国立国語研究所長)

鶴田 道雄 (千葉県袖ヶ浦市立根形小学校教頭)

西村 明 (別府大学学長)

佐藤 允昭 (別府大学教授)

後藤 弘子 (別府大学非常勤講師)

**司会** 小沼 俊男 (別府大学短期大学部初等教育科教授)

松田 美香 (別府大学文学部国際言語・文化学科准教授)

**小沼** 「深め発見する喜び」は、独立行政法人教員研修センターの委嘱事業として2年間にわたって制作した教師対象のDVD調べ学習教材です。学力向上の課題を背負い日常大変忙しい中で取り組んでいた実践校の調べ学習をもとに、言語力とメディア活用能力の向上を目的とした教師の支援のあり方を探ってきました。DVD教材の中では、子どもたちの実践と教師の関わり方について、実践の場面ごとに検討・分析を行い、支援の具体的な方法を明らかにすることができたと思っています。そこで、この教材を教育現場で役立てていただくうえでの考え方について、DVD教材の内容の補完の意味も含めてお話を伺っていきたいと思います。まず、別府大学の西村学長からお願いいたします。

**西村** 昨年度とのかかわりでこのことについて話をさせていただきたいと思います。教員研修モデルカリキュラム開発プログラムの意味について、昨年度、私は、四つの点から述べました。一つは、子どもが自ら調べ・読み・書き・聞き・話すことができる能力を養う過程で新たな事柄を発見する、つまり他の人とは異なる創造力とか構成力、思考力を身につけさせることでした。もう一点は、メディアは非常に便利であるけれどもメディアの限界性を知ることといえますか、最近ではインターネットによる情報を利用しなければなりません、その限界性を知って新たに自分自身で調査していくような方法を考えることです。それからもう一つは、調べたことを相手に伝えるためにプレゼンテーション能力を高めるということ、これが国語力の向上に繋がるのではないかとということです。このような三つの点を生徒たちが身につけるという過程で、教師の指導能力あるいは指導方法を改善し高めるといふ四点目があるのではないかと言うことです。このことは別府大学の教育においても参考になるわけで、昨年度から本年度も引き続き、このプロジェクトに取り組んできたのですが、結果を見ますと、それなりに上記の四点については方向が見えてきたと思います。

今年、DVDや研修の現場を見せていただいて感じたのですが、あるいは私の一つの大きな期待かもしれませんが、調べ学習の概念化というものができる、非常にいいのではないかと考えております。それはどういうことかと言いますと、まず、明星小学校と大分豊府中学校の2つの学校がこの「開発プログラム」の実施過程において常に「なぜ」ということを問いかけておられたことは、やはり評価しなければいけない。つまり、子どもたちが自ら「なぜ」という問題・疑問を出していく、問いかけていくこの過程が一番大切であると考えます。指導方法はいろいろとあるのですが、子どもの関心というものをまず引き出していくということが大事な作業ではないでしょうか。さらに、それを自分だけの関心に留めておくのではなく、他者に伝えていく。つまりそこに、「なぜ」というものがただ単に自分の問題ではなくして人との繋がりの中で調べ学習に繋がっていき、調べ学習の総合力というものが発揮されるのではないかと考えています。そのような意味で、「なぜ」という問題は、グループ学習を通して、調べ、読む、書く、聞き、話すという総合力の問題に発展していく。その意味で、指導力というのはおそらく「なぜ」というのを、生徒たちからうまく引き出すことで、教師からすぐに与えてはいけないように思います。先生が「なぜ」という問題を最初から生徒に与えてしまったら、指導はその解決に向かい、時には生徒の興味から離れ、答えを出すことに生徒は集中してしまう。「なぜ」は答えが出ないこともあるわけで、生徒の興味に裏付けられた学習は広がりを見せなければなりません。この点は非常に微妙なところだと思うのですが、「なぜ」という問題の問いかけは非常に難しい気がします。この点がおそらく今回のプログラムの評価に繋がってくると思いますが。

また「なぜ」という問題を短期的な形で解決していくのか、長期的に解決していくのかということも考えなければなりません。短期的にいえば、メディアや映像技術を使うと非常にキレイに迅速

に解決できたように見えますね。それは、一つの落とし穴ではないかと思います。メディアを使うと答えはすぐに出てくるのですが、本当に自分の「なぜ」の疑問を解決したのかどうかは問題です。しかし、表面的には自分自身が解決したように思い込んでしまいます。そのような意味で言えば、この「なぜ」を長期的に解決していく課題が残るのではないのでしょうか。そのように考えますと、このプログラムを一年間で解決できるのかどうかという問題もできますので、そこでこの度は、ひとつの「調べ学習」のモデルケースを確立し、その概念化に努めるという課題が出てくるのではないのでしょうか。この度のプログラムは昨年度の経験をさらに発展させ、ひとつの考えにまとめていく作業であるけれども、昨年と今年とは取り組みの仕方が異なるので、やはり二つのものをうまく繋いでいただきたいと思います。その過程でいろいろ問題点や課題を見つけ出して、調べ学習というものの本当の意味を明確にし、さらに教育現場にフィードバックさせる必要があると思います。そして調べ学習は本当に大切なことであることを広く訴えていける基礎ができるのではないのでしょうか。以上のようなことで、前年度のプログラムとともに今回のプログラムの取り組みを評価したいと思います。

小沼 では、甲斐先生、お願いいたします。

甲斐 今、学長がおっしゃった調べ学習は生徒一人ひとりが身につけることがこれからの日本人の形成で大切だと思っております。新学習指導要領も調べ学習について強制的に取り上げています。国語科が課題についての調べ方の枠を作る、他の教科はそれを実行するようになっていきます。つまり、調べ学習は、国語科だけのものではなくて、理科や社会科あるいは算数科などでこそ大きな価値をもっています。私は、今回の別府大学の取り組みに、こちらにうかがってはじめて参加しているわけですが、大切なこととして児童生徒がどういう課題をもつかということがあります。例えば大友宗麟という制限された課題の中で、児童生徒が大友宗麟のどういうことを調べるのかというその向かい方についてですが、その点に関しては、先生は指導や指示でなくて支援をしていただきたいと思っております。支援とは何かと言いますと、学習者が自ら考え、自らあれこれと選択し、そしてテーマを確定するというかたちで進んでいくわけですがその時に、先生がテーマを押し付けることではない。早めに思いつく子もおればゆっくりめな子もいる。その子どもたちの個性に合わせた形で、しっかりと考えるということを先生は指導していただきたいと思っております。そのテーマということですが、簡単に言えば5W1Hだと思いませんか。大友宗麟の何をするのか、それは、いつのことだったのか、なぜなのかというようなことを見つけていくことだと思います。その見つけ方ですけれども、今回の中学校の調査で言えば、みだりにインターネットに頼らなかったことが良かったと思います。足で稼いでいました。図書館に行って資料を見つける、現在残っている記念館とか、あるいは屋敷跡などを訪ねて知り合いの方などにインタビューをするという、直接訪ねていくという方法をとっておりますが、これは、大変結構だと思います。他の都道府県の先生が見ると、例えば大友宗麟の問題というのは実は、どうでもいいわけですね。その大友宗麟の何をどのように明らかにしたかという道筋そのものを参考にしたいわけですね。例えば、小学校ではインターネットを活用したとすると、調べた方法というものを自分達も使ってみようとする。それから、記念館を訪ねて行ってそこで教わったことというのがあれば、それも活用できます。また、大分豊府中学校の佐藤先生が、訪問する前にどういう依頼文を書いたか、それから訪問した先でどういうインタビューをしたか、それから帰った後でどういう礼状を書いたか、そういう資料も見せてくれたのですが、これが大変結構だと、私は思いました。生徒が出した礼状に対して逆にお返事を書く

れているところもありましてね、これでまた生徒は喜んでさらなる礼状とともにその成果物をお送りするだろうと思われます。このことによって、これまで知らなかった方との人間関係が作られていくわけです。そういうことを私も期待したいと思っております。私が希望するのは、メディア関係については鶴田先生にお任せするとして、私は、図書館の活用ですね。とりわけ、読書ということをここで強く申し上げたいと思っております。例えば、ある童話作家について調べようとしたらその作家の書いた作品を通して作家の実像というものをつまえていくということが大切だと思っているわけですが、そういう形の、本格的な調べ学習というのに進んでいけると大変に結構なことだというふうに思っております。以上です。

**小沼** ありがとうございます。

鶴田先生、お願いいたします。

**鶴田** 私は、小学校の子どもたちと毎日過ごしています。学校の先生方と最近の子どもたちはどうなのかという話をすると、必ず出てくるのが、与えられた課題には本当に素直に一生懸命取り組むが、自分で課題を設定し、それを解決していくことは苦手だということです。それから、人の前で話をする、自分の考えを言うことが苦手な子どもも実に多いですね、こんな話がよく職員室ででたりします。今回の二年間の取り組みですが、私はたぶん全国各地にこういう子どもたちが多いのではないかと考えているわけですが、そういう子どもたちの指導・支援に大きく関わることができるのではないかと思います。

今回、国語力・言語力、それから、メディア活用能力という言葉がキーワードになっていますが、それらを調べ学習の学習過程を通すことで、自ら課題を解決でき、自分の考えを人の前で自信を持って言える、そういう子どもたちを育てることに必ずや繋がってくるのではないかと思います。新しい学習指導要領が発表され、基礎・基本となる習得型の学力をしっかりと身につけなさいということも大切なことです。ただ、もう一つ、何度も言いますが、活用型や探求型の学力の育成に、今回のこの取り組みは大きく関わってくるのではないかなと思います。

この調べ学習ということですが、まだまだ国語科の話であるとか、あるいは総合的な学習の時間の中で行えば良いというような考えをお持ちの方が多く、なかなかその他の教科の先生方が少し場の違うことであるというような認識をお持ちなのかなということを感じています。何も調べ学習という特別の学習があるわけではなく、これは日常行っている問題解決的な学習過程なわけですから、理科の時間、あるいは社会科の時間に、実験や観察をしながら、あるいは、社会科の調査活動をしながら課題を設定し、予想し、自分で調べ、そして、まとめ、発表し、考察していくという学習過程そのものだと思うんです。そういう意味では、今回のDVDは、教科や領域を問わず、すべての先生方には是非ご覧いただきたいと思うわけです。そして、各教科の授業改善という視点でご覧いただいて、理科の時間、あるいは社会科の時間に、こういう手法、こういう学習形態、学習方法が、組み入れられないだろうかということを考え、今言われている言語力の育成は全教科、領域を含め学校教育活動全体で行っていくんだととらえ、学校のカリキュラム全体を結びつけていく。その辺が、私は大事なのではないかと感じています。

**小沼** ありがとうございます。

佐藤先生お願いします。

**佐藤** 私が今回の一連の過程を見まして関心を持ったのはやはり、調べる方法です。一番身近なものは

図書館の活用、それから最近インターネット、インタビューと三つあるかと思いますが、この図書館の整備がどれくらいされているのかなと。小学校・中学校の図書館ですね。それから身近な公共の図書館などに、今回大友宗麟だとか南蛮貿易だとかそういったテーマで調べていったんですけども、資料がどのくらいあったのかなということが一番気になりましたね。図書館の整備となりますと、資料の他にも学校司書はいるかないか、あるいは司書教諭の配置というようなことも関係してきますけども、やはりそういった基盤が、子どもたちの身近に十分に整備されるということが、これからの課題ではないかなと思います。最近よく何でもかんでもインターネット Web に頼って、調べてしまう。そういったことがいろいろと批判的にかどうかわかりませんが言われていますが、やはりそうになってしまう要因というものが、図書館の整備というようなことに関係してくるんじゃないかなと思っております。しかし、今回の調べ学習では、例えば野上弥生子さんを調べるのに資料館に直接インタビューに行ったという話を聞きました。そういったことには、臆せず果敢に挑戦しているなど、今の子どもたちは、わりと得意なのかなと、そう思いましたですね。

**小沼** それでは、後藤先生お願いします。

**後藤** 私はポスターセッションを通して子どもたちに何が一番財産として残ったのかということを考えてんですけど、人と関わりあうことの良さを実感したんじゃないかなと思います。今、歪な価値判断のもとに想像のつかないような事件が次々に起こっている中で、子どもたちは学校の友だちだけでなく先哲に関わる人々、施設の館長さんや学芸員さんとか、いろんな立場の方とコミュニケーションをとって調べることを進めていきましたよね。私は後藤樞根を紹介したんですけど、かわいらしいお礼の手紙をいただいて図書館の職員みんな回し読みをして、そしてまたポスターを由布市の「ならねっ子まつり」で展示するという関わりがあって、自分をいろんな角度で見つめ直すとかいろんなもの見方考え方の尺度を知っていくということで、調べ学習の終結にポスターセッションをもって来たことはとても有効だったと思います。それから、私も大分豊府中学校の生徒の活動に入っていたんですけども、子ども理解が一挙に深まるということが、教師にとっては大きな財産になると思います。私は平成8年6月に「大分の先哲」のポスターセッションを実践しましたが、二年生の飛び込みで、小学生の頃から非常に問題の多い学年ということを知っていました。ところが「大分の先哲」の調べ学習を展開するうちに、子どもたちが素直でたくましくて、素晴らしいということがわかって、貼られていたレッテルを取り去って、その学年を育てあげ卒業まで見守っていこうという勇気が湧いてきました。ですから、調べ学習と聞くと引く方が多いですね。大変だということが頭にあって。でもそれ以上に素晴らしいものを子どもやその調べる対象に関わる人々との関連でいただきますし、また自分の指導法を異なる視点から見直すこともできます。子ども自身も、友だちやさまざまな大人にかかわっていくことで新しい自分を発見して、変わっていく。例えば、豊府中学校では不登校だった生徒が、これをきっかけにグループの中でコミュニケーションを深めて学校に来ることができるようになったという報告もありましたので、人と関わりあうことの良さという財産を中学校二年生の時期に得た、素晴らしい学習活動であったと考えております。

**小沼** 確かに今回は、実践の経過について担当の先生のお話によると、普段は人とあまり話すことがなかった子どもたちが、積極的にグループの中で意見交換を行うことができるようになったという、子どもの変化を見ることができたとおっしゃっていました。それだけ、各ステップ各段階で子どもたちがコミュニケーション能力を磨き、さらに先ほどお話にありました、トータルとしての言語能

力を段階を追って身につけているという確認ができたと私は実感しているんです。

**後藤** 最初の商業タイムは言葉がたどたどしいですね。ですが、次第に自分の知らない相撲の世界とか音楽の世界、児童文化の世界の言葉を獲得して行って、今まで漠然としていた先哲の概念碎きの過程で言語感覚を磨き、言葉自覚を深めて、感性と表現とを豊かに繋げていっている、後ろ姿に拍手したいような気持ちにさせられました。

**小沼** そういった言語能力を培うものになるものは、伝え手自身が伝えるべきしっかりした情報をつかんで、それを自分のものにするにありますが、鴫田先生、そういう意味での情報メディアの活用という観点から今回の実践をご覧になって、いかがでしょうか。

**鴫田** 今回は、調べ学習の学習過程の中で、課題設定の段階、それから発表の段階での教師の支援のあり方に焦点をあてた部分が多かったのではないかと感じています。

調べ学習はやはり子どもたちが「調べる」という行為があるわけですから、子どもたちに「調べる力」をつけていくことが、私は一番必要だと思います。そうすると、課題が設定された後に、まず資料を集める段階があります。それから、資料を集めたら、その莫大な資料を整理していく段階があります。さらに、それをまとめあげていく段階があると思います。

この例えば、資料を集める段階で、情報メディアという言葉がありますが、私はメディアというのは、やはり中心となるのは図書資料を含めた活字メディア、印刷メディアであろうと思います。ここはやはり、学校教育が大事にしていかなければならないところだと思っています。それから、情報メディアの中には音声・映像メディア、ビデオやDVDなどもあります。こういうものもやはり情報の一つです。そしてもう一つは、電子メディアと呼ばれるインターネット等。これらを総合的に含めて、私はメディアと言ひ、そしてそれらを子どもたちが使いこなす力をメディア活用能力と考えることにしています。

例えば、資料を集める段階で図書資料にあたらせるときに、図書の分類がわからなければいけません。図鑑の使い方や百科事典の使い方も知らなければいけません。目次や索引を使うと調べるのに便利だということも大切なことです。当然インターネットの検索の方法もきちんと指導しておくべきことだと思います。資料を整理する段階でよく行われるのはファイル資料を作る、あるいは資料リストを作る、情報を記録カードに表していく、そういうことも必要だと思います。それから、まとめる段階と簡単に言いますが、まとめ方には多種多様な方法があります。小学校低学年からカードに表す、紙芝居にする、あるいは新聞に書く、ポスターにする、パンフレットを作る、リーフレットをつくる、そしてレポートを作るなど多種多様にあるわけです。こういうことを一つひとつ教えて指導していくこと、これが私は大事だと考えています。知識をそのまま与えていくことが教育ではないと思います。

子どもたちが自分で課題を解決していくそのすべを教える、方法を教えることこそが教育なのだろうと思います。ですからやはり我々が学び方を学ばせるんだという視点に立たないと、具体的に教師の役割、支援のあり方というのは、見えてこないような気がします。そういう意味で、現在、学校図書館の学習情報センター化が叫ばれていますが、こういうところをベースにして、子どもたちに基本的な知識・情報を獲得するすべを教えること、それが力になっていくことを確認したいと思います。

**小沼** そのような点からの教師の支援として、調べ学習に取り組む環境を整えるという課題がありま

す。この環境設定を子どもたちの主体性との関係で甲斐先生はどのようにお考えになりますか。

**甲斐** 私は、これからは、学習者の主体性を大切にする教育が期待されると思うんです。高度成長期という時には、とにかく叩き込み、世界に追いつけという形で知識を注入される、そういう知識注入型の教育が比較的多かったと思います。いまは不透明な時代で、五年後の日本がどうなっているかは、誰も予測がつかないような時代になっています。そういう状況の中で、なおかつ、子どもたちには生き抜くための力というのを我々は教育として与えていかなければならない。それは何かといたら、「自分で考える、自分で問題を見つける、見つけた問題を自分の力で解決する、解決したことを他の人にも説明できる、そして、質問にも応じられる」という力ということになります。これは、教師から言えば注入とか指示・強制ということではなくて、支援ということしかないわけです。自分でどういう問題を見つけていくかが何よりも大切です。仮にその課題を教え込んでしまったら、学習者は受身になってしまって、主体的な行動がとれないことになります。それが今まで三年ごとに行われている OECD の PISA (ピザ) の読解力の解答傾向にあるわけです。日本は、残念なことですが、白紙解答が世界で指折りのところにあるんですね。A か B かその根拠は何かということについて書くときに、A か B かを答えるのが主体性なんですけど、これまでは先生が A だよと教えた上で A を選んだ理由を考えさせていた、つまり、A か B のどちらを選ぶかという最も大切なところの指導を手抜きしてきたわけです。したがって、教育における先生のその根本的な姿勢としては、待つということ、育つのをしっかりと支援することが大事であろうと、そのためにはもちろん教育環境として図書館に優れた書物を置いて利用できるようにすることが大切なんです。最近図書館がですね、コンビニに学ぶというようなことがありましてね。コンビニってというのは、例えば幼児を連れていくと、幼児の目線の所におもちゃやお菓子があるわけです。小学校も低学年の子どもの目線に添った場所に絵本を置く、高学年の所には高学年用の図書を置くっていうような配慮まで行われつつあります。そういう形で図書館を整備していく。そのうえで、またインターネットも備える。どういうことが必要かについて検討して、児童生徒の学習を支援していく形になっていけると良いと私は思っております。

**松田** 続けて甲斐先生にお尋ねしたいんですけども、教師自身が、支援の立場に立っているかどうかを振り返る、チェックする仕組みをどのように考えたらいいんでしょうか。

**甲斐** 先ほど申したように、そのピザの読解力の調査で、なぜ日本の生徒に白紙が多いかといいますと、これは知識の注入主義の結果なんです。その問題文ですが、これは毎年実施されはじめた全国学力調査の国語の問題と同じく、難しい問題はないのです。誰でもできるんですけども、しかし自分で考えないとできない問題がそこに提示されております。そこで、そういう問題の類例を教室で提示して、子どもたちが迷っている場合は、その根拠をいろいろ話し合うような形で検討を加えさせるような授業が良いと思います。実際の授業を拝見できれば、注入型か主体的な学習の支援型かがわかるんですけど、全国的にいえば他県に追いつけ、追い越せという競争型の教育に向かう県も少なくないものですから、支援型の授業に向かうことは難しいと思います。

**小沼** 今回の教材でも、先生方が各場面各段階でどのように言葉かけをしているかというところを描きたいということで実践を進めてきました。こういう場面で一番微妙で難しいと思うのは、今甲斐先生がおっしゃった、どこまで指導するのか、あるいは主体性をもたせるためにどういう声かけ、設問をするのかを、瞬時に考えなければならぬということになりますね。体系化された具体的な指導方法がない中で生徒と関わっていただきました。鴫田先生は、この指導と主体性との関係をど

のようにお考えになりますか。

**鴫田** どこまで教え、どこまで待つか、難しい問題ですね。指導と支援、いろいろな言葉があるわけですが、私は調べ学習をやっている、課題にしても課題に対する結果にしても、これを教師が知識の部分で示してしまったら、これはもうどうしようもないと思うんです。子どもたちの前に立つ指導者としては失格かなと思います。

課題を自分で持つようにするための方法を教えていくことはいくらでもできます。そして、設定した課題に対して一つの結論を導き出すためにどういう道筋があるかということを示すことも、教師にとっていくらでもやれるわけです。その部分を支援と考えたいと思います。先ほど、学び方を学ばせると言いましたけれども、その意味では、例えば百科事典というのがあるってその使い方はこうなんだとか、百科事典には何種類もあるんだとか、図鑑と百科事典との違いだとか、あるいは索引や目次だとか、そういうのを利用すると早く必要な情報を得られるとか、こういう部分はやはり私は教えていかなければいけないことだと思います。これは、課題を解決するための方法を教えているんだと思います。これは、大人が子どもたちに示していかななくてはならない。しかし、子どもたちが設定した課題に対する答えを教えてしまっただけではいけない。私はそこで支援のあり方を区別していたところがあります。

**小沼** 確かに子どもたちの様子を見てみますと、教師の側が指導に回っているときの子どもたちは、聞き入ってしまったている、自分で考えたことをことばにするという動きがとまる。何か待って一緒に考えている、そういう一つの場面ですと、子どもたちの発想がだんだん具体的になり話し合いがはずんでくる、そんな光景もありましたね。

**甲斐** ありますね。さっきの松田先生のご質問に対する答えですけど。教師はカウンセリングマインドという立場が要求されていると思うんです。相手が何を考えているかということを受容して行って、その上でその子のいまの思いというのを、深め高めるにはどうすると良いかということ、子どもの立場に立って待つということなんです。それはいい考えだよというように肯定的に受け止めていく。「こうしなさい」とか「バカ、それはダメだ」とかというような高圧的な指導は良くないと思います。

**後藤** 大分豊府中学校の佐藤由美子先生の場合は学習の手引きというのをずっと継続して、子どもたちが一人学びできるように導いていっていたわけですね。その学習記録を佐藤先生が読むことによって子どもたち一人ひとりがどの場面でのどのような支援を必要としているのかということ把握していらっやったと思いますね。だから、あの支援には目の前の子どもに瞬間的に判断して口頭で言う場合と子どもが一人歩きできるような学習の手引きを用意してその表現を読みながら、このグループはここが足りないんだとかこの子はここで立ち止まって別な方向に行っちゃったので、ここに引き戻さなくっちゃとか、手引きを読み取って指導していく、そういう支援のあり方も大事ではないかと考えております。

**甲斐** ちょっと追加すると、ここは小学校の事例ですが、田中先生がビデオの中で研究計画書というプリントを配りました。あれは、私は結構なことだと思います。その配布した時点で、先生は、この研究計画にはそれぞれこういうことを書いていくんですよということを説明している。これは指導なんです。テーマが全員違うわけだから、その書き方だけはしっかりと教えていく。そのうえでその子どもたちが書いている内容を見て、温かく見守っていく。間違っている場合には、「さっきの

聞いてなかったね」と、もう一回個別にちょっと指導していく。書き方を指導するわけで内容を指導するわけではない、こういう、さっき鴫田先生がその指導とその支援というこの区別を言われた。私なりに改めて説明するとそんなふうなんです。

**松田** 学び方の学びということをきっちりしていかなければいけないということですよね。その点で鴫田先生の地域では学び情報センターのようなものを、小学校とか中学校につくって、そこから発信していくというアイデアがおありだということを知ったんですけども、大学図書館との関連では、どのようなことが考えられますか。佐藤先生いかがでしょうか。

**佐藤** 大学のというよりも図書館の壁を取って公共図書館、大学図書館あるいは小学校・中学校・高等学校のそういった図書館のいわば知的資源といいますか、そういったものを共有するといった考え方ですね。これは現在だんだんと浸透して普及していております。

特に鴫田先生のところではそういったことが非常にうまくいっていると聞いているのですが、どうなんでしょうか。

**鴫田** そうですね。公共図書館と学校図書館のネットワーク化等を含めて、私が住む市はかなり進んでいると思います。まあ、その前に学校の図書館が学習情報センターになっていかなければいけないと思います。子どもたちが学校図書館というところに行けば、必要な情報がたくさんあることを感じなくてはいけませんね。これは、図書資料・活字資料だけではなくて、その中でも新聞だとか雑誌だとかも含めて、整備しなければと思います。それから、音声・映像メディア、ビデオだとかDVDなども学校図書館に行けばある。そして、インターネットに接続する環境もある。そこにはファックスや電話などもある。コピー機もある。当然そこに司書がいる。そういう学習情報センター的な場所が学校の中にあれば、子どもたちが課題にぶつかったときにまずはそこに行って、いろいろなメディアにあたってみよう、そしてそこから必要な情報を探し出していこうということができると思います。ただ学校図書館というのは非常に狭い。蔵書数も限られています。一万冊に満たない小中学校が多いかなと思います。これでは、読み物は揃うかもしれませんが、学習の資料はなかなか揃うものではない。そう考えると、公共図書館とのネットワークは当然必要になってきます。そこで、公共図書館との情報ネットワーク、そして、本が運ばれてくるという物流のネットワークを含めた学校図書館と公共図書館の連携、それは、資源供給型の図書館づくりということで、私の市は積極的に行っています。

これらを含めて子どもたちが、学校図書館を入り口にして、将来的には生涯学習の視点に立って、公共図書館の活用も行える市民づくりということを、学校教育の立場から考えていくことも必要なことだと思います。

**佐藤** それを進める大きな力になったのは、やはり最近のインターネットの普及だと思いますよ。これなくしては、そういう知的資源の共有というのはなかなか進まなかったでしょうね。

**松田** 西村学長には、調べ学習の概念化をしたいというお話がありましたが、ちょっと私には難しかったのでもう少し説明していただけないでしょうか。

**西村** そうですね、確かに難しいと思います。調べ学習の概念化というのは、恐らくこれから非常に問題になってくると思うし、調べ学習とは結局何か、ということとその本質に関わって平易に表現することであり、多くの人々に理解されるような形を取ることだと思います。先に述べましたように、調べ学習というのは、学習の基礎を「なぜ」というところに置き、疑問から始まります。調べ

学習というのは、ある意味で自分の経験から言えば、一生「なぜ」ということに係わって生きてるように、生き方に結びつくような問題であるように思います。子どもにとっても同じであり、この「なぜ」ということはある意味で長期的な調べ学習に繋がっています。それゆえ、調べ学習というのは非常に長期的に考え、ある場合にはその生徒にとって一生の問題を投げかけているというように考えざるを得ない。そのような意味で、この調べ学習というプログラムを展開していく場合に教員がどういう視点に、どのような観点に立つかということが重要であり、やはり長期的な視点に立って生徒を支援、援助する姿勢が大切ではないでしょうか。短期的な視点で調べ学習を行った場合には、非常に短期の成果を求める方向が生じてきます。それゆえに、調べ学習を始めるにあたって、それを先生方がどのように考えているのかということが非常に大事なことで、このプロジェクトの出発点であると思います。これから調べ学習を普及・実践していく場合にもこのことが課題になるのではないのでしょうか。しかしながら、そうだとと言っても、短期的な視点は必要ではないかという、そうではなくして、調べ学習で短期的に問題解決していかなければならないものもたくさんあるわけです。そうであるけれども、基本的に調べ学習というのは非常に長期的なものだという視点に立ちながら、短期的なものも考えながら進めていかなければならない。その場合に、「調べ学習」の基本的なねらい、役割を普遍的な言葉で表現できるようにしておかねばならない。確かにその概念化というのは非常に難しいことではありますが、「なぜ」ということを追求していくということが結局調べることに繋がり、それは本来的に個人の行動ではありますが、社会的に展開していき、個人がまた総合能力を高めていくプロセスであると考えてはいかがでしょうか。調べるという基礎能力から始めて、伝えるという能力、それはコミュニケーション能力・言語能力に結びついていくわけで、ある意味で総合的な国語力の向上を意味しているのではないのでしょうか。そのような意味において、非常に長い視点を持ちながら生徒の自然・人間社会への興味を引き出し、自ら調べ、人に伝えるという過程を支援していくということが調べ学習と教員の指導力の問題ではないかと思っています。

ついでながら、最初に申し上げましたが、大学でも同様でむりやり知識を与えても仕方がないし、このような知識は学生の栄養になっていない。やはり、生徒の主体性、あるいは生徒の本当に興味を持ったものを引き出していくという態度が大変重要です。これは大変難しいことですが、やはり教員側の指導力というか、教育力が問われていると思います。そのためには、教員は、生徒をよく知っていないと生徒がいま何を問題としているのかわからないし、また「なぜ」というのを引き出せないでしょう。そのような意味で、教員の幅広い知識と指導方法等が必要になってくると思います。このように考えますと、調べ学習というのはただ課題を与えて、生徒に調べさせるのではなく、生徒が自ら課題を発見し、先生がそれに対して非常に強い研究力や研究心をもって、生徒を支援していくことではないのでしょうか。

**鴫田** 調べ学習には大きく目的が二つあると思うんですね。一つは、教科指導の中で調べ学習を取り入れた場合には、これは何を調べ、どんな知識を得るかということをはっきりと明らかにしなければいけない。教科指導には目標と内容が規定されているわけですから、教科指導の中では子どもたちにつかんでもらわなければいけない知識、そういうのがあると思うんです。一方、総合的な学習だとか、自由研究的に行う調べ学習というのは、私は到達しなければいけない、獲得しなければいけない知識というのは、個々の子どもによって違って良いのではないかと思います。

そこで、調べ学習で我々が子どもたちに身につけさせたい力は何かということ、それは生涯生きて

働く力だと思います。その生涯生きて働く力というのは、自らの課題を設定する力であり、それから、課題が出てきたときにその課題を克服するために、解決するために、情報を集めて、調べていく力であり、それをまとめて人に伝えていく力だと私は考えています。ですから、そういう部分については知識は教えないけれども、そのための方法は教えていく。そこを支援していく。そして、子どもたちがどんな知識をどこまで得るか、その深さは個々の子どもの能力や興味関心の程度によって変わっても良いのではないかと思います。

**後藤** 調べ学習が大変だとか、取り組んで失敗したとよく聞きますが、それはなぜかという追究があると思うんです。やはり、学習集団づくりの基礎訓練っていうところで、今回の場合は「一人調べ」ができる集団であったということと、もう一つは、「学習記録」を筆まめに書き続ける子どもたちであり、最後にグループで「思考を組織化」していくことができたということだと思います。それぞれが調べてきたことを持ち寄って話し合い、聞き合い、共有化するという。ポスターを作って自分がどの項目をセッションの中で一番言いたいかわかったときに、話し合っ合意を形成していく力、そういう基礎の訓練をないがしろにして、調べ学習にいくと失敗してしまいますね。調べ学習が成立するためには、一人調べと学習記録とグループの話し合い、この三つがうまくかみ合う必要があります。そこを調べ学習の土台として、どのような学習行為を有機的に総合化していくのか、それが実は本当に大切なところ。日常の授業をゆるがせにしないで、子ども一人ひとりの個人差をきっちりとらえ、つけたい力をくっきり把握しておく。調べ学習が失敗したら、そこに立ち返ってやり直せばいい。「調べ学習は楽しいもの」だと佐藤由美子先生がおっしゃってましたけど、本当に子どもの後姿を手をたたいて喜びながら見守って、最小限の支援を、暗示・示唆・助言をしていく、そして、子どもとともに成果を実感する。その楽しさが、調べ学習にはあります。そのような学習集団づくりに日常的に取り組む必要があります。

**西村** 少し話させていただいていいでしょうか。調べ学習の昨年度と本年度との経験を比較してみる必要があります。両者とも素晴らしい経験であり、学ぶべきところは沢山ありますが、あえて比較し、問題点を考えてみたいと思います。今年は、恐らくきれいにまとまったDVDが完成するでしょう。それは、昨年度の経験を踏まえているからそのような成果が得られたのですが、同時にさらに良く検討してみる側面もあるように思います。つまり、このプログラムそのものの良さと、この一年間をスパンとするプログラムの限界性が少しわかったような気がします。つまり調べ学習はそれほど簡単なものではないということがわかりました。これは、非常に貴重な経験だと思います。昨年度のプログラムにおいて感動した点が幾つかありました。例えばプレゼンテーションを行ったときに、小学生は手作りで、グラフや絵を書き、皆に説明しました。素朴で、荒削りでありましたが、非常に感動しました。さらに、取り上げた題材も環境問題であり、宇宙の問題で、非常に広い夢みたいなものを皆に問いかけていました。今年のプレゼンテーションでは非常にパワーポイントの使い方が上手で、仕上がりがきれいになっており、内容も豊かで完成度が高いものでした。それは、恐らく辛抱強く「なぜ」の問いかけを基軸に指導された結果ですね。その意味で、調べ学習の指導力の成果は明らかになったようです。昨年度には手作りの場合には報告者たちの学習過程が見えておりましたが、今年のプログラムでは非常にきれいな形に完成されていて、大変見やすくなって、調べ学習の過程ではなく、成果がはっきり描き出されていますね。しかしながら、DVDを通してその調べ学習の過程を拝見しますと必ずしもきれいではなく、先生も生徒も苦闘している。生徒は長い期間にわたって自分の足で調べ、他の生徒からの「なぜ」という質問を経て自

ら「なぜ」をさらに展開していく。そして、プレゼンテーションでは「どのように」という形で「なぜ」を表現している。この成果は高く評価されることになります。ところが、調べ学習の生々しい過程を露出した昨年度の経験と非常にきれいに調べ学習の成果をまとめ上げた今年の経験については、どちらが良いとか悪いとかということではなくして、佐藤先生も言われましたが、結果や成果だけを見ると、技術の中に内容が隠れてしまうというか、内容そのものをもっと深く検討しないといけない場合にも、技術的にうまく出来上がってしまうと、問題は解決し、うまく出来上がったということになってしまい、残された課題が見えてこなくなってしまう危険性もはらんでいます。手作りで行ったものは技術的にも内容的にも課題を残したままであることを皆に明らかにしますね。「なぜ」という問題はなお続いており、つぎの「なぜ」に結びついていきます。これらのことを考えますと、先端的なメディア技術を使う場合、どのように調べ学習を展開し、それをどのように広く皆のものにするのかというのはこれからの課題として残っているように思います。先端的なメディア技術を駆使し内容を浮き彫りにするとともに、残された課題を独自の方法で示す手立てが必要であるように思います。

今回は全体的に非常に成功した事例であると思いますが、豊府中学校の場合、先生はまず「先哲の生き方」を生徒「自らの生き方」に引き付けるという非常に大切な問題を提起しておられますが、これは真に難しい課題であり、それほど容易に回答できるものではありません。生徒がそれぞれ調べた調査対象を通してそれをどのように考えたのか、どこまで考えることができたのかを生徒同志で話し合う場、さらに調べ学習を通して自分がどのように変化したのかを自ら見つめ合う場が設けられると、この度の「調べ学習」とその指導の成果がさらにつぎに続く課題を私たちに示してくれるように思います。

昨年度は不特定多数の学校を対象に調べ学習における指導が実践され、そのあり方が検討され、問題や課題が明らかにされました。本年度は2校において実験校として集中的に、時間をかけてモデル的な調べ学習とその指導が行われ、素晴らしい成果が抽出されました。調べ学習における指導力の重要性と意義、生徒の学習能力の飛躍的発展、メディアの利用能力、コミュニケーション能力の向上など、調べ学習がもつ意味を明らかにし、そしてまた、それらの能力を引き出すものは「なぜ」であることも明らかにしていただきました。その意味で、この二年間の経験というのは非常に大切な意味を持っており、それらの二つの経験を比較検討し、調べ学習というのを「概念化」していただきたく思っています。

**甲斐** 私、教科内でこういう調べ学習をやる時は、極力手作りで、A4一枚で、というような形のものが良いと思っています。おっしゃるようにそのパワーポイントを使うとカッコいいものですから、目先の画面にごまかされるという部分があります。内容の掘り下げでなくて技術的なところにカバーされる部分がある、ということがあります。アナログのポスターを作成する場合ですけども、その一枚の中にどういう項目を入れるかですが、きっと7～8項目を上限とするだろうと思います。7～8項目というのが逆に今度佐藤由美子先生の三分間で発表するという時の、三分間の中に占められる項目数ということだと思うんですね。DVDを見ておきますと、少しずつ改善されて最終発表で一番良くなってくわけです。何が良くなっていくかって言ったら、三分間で発表する子どもたちの言葉が自分の言葉に定着してくることがあります。それまでは借りてきた言葉を使っていた。それが自分の言葉として消化されたものを発表していくということになっていくものですから、質問ないですかって言うとき、「あってほしい、たくさんして下さい」というようなそういう積極的な気持ちがありありと見えてくるんですね。そして、質問を受けて、その子どもたちが喜

んでその知識を提供する。それはその、三分でしか発表できなかった、削りに削っている、あとは尋ねて下さい、と。質問してくだされば、話せますという、そういう喜びに満ちた感情が質疑・応答の場面で見られたように思うわけです。そういう点でポスターを作るときに本当に最新版を用意するのが良いのか、あるいは手作りでいくのかという何か二つ組み合わせてですね、手作りも一回はやっていきたいけど、パワーポイントも習得してもらいたい、こういうようなことをちょっと思っております。

**小沼** 今甲斐先生からお話になった、自分の言葉というこのことを、二年間の調べ学習の実践を見てきた経過から振り返ってみますと、いわゆるこの自分の言葉の獲得というまさに言語力育成の象徴的な出来事が、調べ学習に取り組んでいる間だけで実現するのかどうかを考えると、疑問に思うんですね。各地で行われている調べ学習の発表に接して感じるのは、どちらかといいますと、写したものを読んでいるケースが多いんです。自分の言葉までにはまだ距離があります。言語力の育成というのは、甲斐先生、鶴田先生からもお話がありましたように、全ての教科との関連で捉え取り組んでいく必要があるということをここでもう一度確認しておきたいのです。単に調べ学習の中での発表のための訓練で終わるのではなく、国語科の中で何をやるのか、社会、理科、算数や数学など各教科との関連で言語力の育成を捉えていくことで初めて、自分の言葉としての言語力が築かれるのではないかと思います。今回の実践で、自分の言葉として評価された大分豊府中学校2年生は、実は1年の時から表現力の訓練を受けているんですね。その力が今回の調べ学習のもととなり、最終場面の三段階のステップで磨き上げられるという経過を踏んでいるということがあります。このことから、他の教科との関連で言語力というものをしっかりと見据えていく、そういう視点が必要になってくる。その中に調べ学習が入ってくる、というふうに考えることができるかなと思えました。

**甲斐** 今の言葉に一言だけ足しますと、大分豊府中学校の発表は、書き言葉で書き上げたものを読み上げるという発表をあえてしていなかった。そして、項目だけを順番に並べて、この項目については話し言葉で生徒が生み出すという形をとっていました。したがって、もう一回やっごらんということになると、最初と二度目では言葉もいくらか違ってくる。これが、自分たちの言葉による発表だと思えます。読み上げると聞きづらい。そこで、いったん文章で書いたものを隠して、どういう順に話すかだけは、メモをしてそれによって話すことによって難しい言葉は省略する、言い換える。聞き手に分かりやすい言葉で伝えようとする、こういう心遣いがそこに表れているような気がします。この努力は賞賛に値すると思えます。

**西村** この度、別府大学においてこの二年間「調べ学習」のプログラムを進めてきて、先に各先生が言われましたように、非常に大事な視点や経験を共有することができました。昨年度教員免許状の取得に関わる教育課程に対して実地調査が行われましたが、その中で重要な問題が指摘されました。別府大学には、大学と高等学校、中学校、小学校という多様な教育機関が存在しており、それらの間の教育面での連携というものは今後無視できない問題であります。連携と協力を通してそれぞれの場で先生の指導力を向上させなければならない。そのような意味で、今回のプログラムの実施とその結果は、調べ学習の限界性や今後の広がり・展望を与えてくれました。別府大学の教職員は、ここでの経験と問題を自分達の事柄として受け止めてゆくための教材だと思えます。それゆえ、この二年間のプログラムの経験とその総括を別府大学の先生方にフィードバックさせて、大学の教育

改革に繋げていかねばなりません。

**小沼** 今回のDVD教材「深め発見する喜び」は、明星小学校と大分豊府中学校の実践をもとに、教師の支援のあり方を明らかにしました。これは、単に、「大友宗麟」や「大分の先哲の生き方に学ぶ」をテーマとした調べ学習に限定した支援の報告ではありません。また、児童・生徒の取り組みについても、模範事例の紹介としてではなく、調べ学習の経過について分析、検討を行い、それぞれの現場で実践する場合の手がかりをつかんでいただくために制作したものです。この教材の活用の際には、こうした制作意図をご理解いただき、今回の結果を出すために、教師がどのように支援してきたのかを客観的に見つめ、そのことをそれぞれの現場でどう生かせるのか、あるいは、よりテーマを深めるためにはどのような支援が必要なのか、子どもの発達段階に応じた支援の方法を構築していただければと思っております。

ここで、支援の姿をDVD映像として公開することにご協力いただいた実践校の先生、また全体のご指導をいただいた甲斐先生、鶴田先生に心から御礼申し上げます。なお、DVD「深め発見する喜び」は、平成19年度には「教員の指導力を拓く調べ学習」(118分)、今回平成20年度は「言語力とメディア活用能力の向上を目指す教師の支援」(140分)をテーマに教師向け調べ学習教材として制作しました。この二つの教材を通して、言語力とメディア活用能力の向上を目指す教師の支援が各地で花開くことを願っております。

どうも、ありがとうございました。